みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

収納と間 (マ)(私のスケッチ・ブック (19))

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 明子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005902

私のスケッチ・ブック(19)

収納と間(ま)

国立民族学博物館 助教授
森　明子

■日常生活の感覚

しばらく外国で生活すると、日常生活の感覚が知らないうちにずれて、ふだん見えないものを発見することがある。

たとえば、発話や対話のときの間(ま)のとり方がある。いま口を開こうとしているのか、あるいは、沈黙するつもりであるのかを察知する、呼吸のようなものがあるのをあらためて認識した。会議の場合、発言者のつくる間は、しばしば議事のゆくえにも影響する。外国の人から見ると、日本の会議は、奇異に見えるかもしれない。

健康と食は、あいかわらず大はやりであるが、日本では、収納にも高い関心があるようだ。テレビ番組のテーマとしてさかんに取り上げられていて、住まいのリフォームを含めれば、その数は健康や食に次ぐ。

これらの番組が人気を得る背景に、モノも食べ物も多く持ちすぎて、処理しきれなくなった現代人の生活がのぞく。テレビ番組を見ているかぎり、収納とは、無駄なスペースをなくすことであるようだ。さまざまな工夫が、すきまを埋めていくために考案され、意表をつく奇抜なものが注目される。

■「収納名人」の技

たとえば、100円ショップの商品を利用したアイディアが取り上げられる。「収納名人」ともなれば、単にある製品を別の用途に流用するようなレベルで甘んじてはいない。さまざまな商品を組み合せて、ひとつの装置をつくりだし、それを収納の小道具とする。

ターンテーブルによる回転運動、コロ装着による前後左右の運動、輪ゴムの弾性を利用した、もどり運動など、さまざまな運動を取り込んだ装置がつくりだされる。これらの装置は、主婦がつくることを前提としているから、軽量で小型、しかも安価・容易であることが重視される。その反面、耐久性は乏しい。輪ゴムの耐用期間などは、よくて数か月だろう。

こうした装置が、小道具として取り付けられた収納空間は、当然の帰結として、複雑なものになる。空間が二重三重の構造をもつので、空間の全体を見わたすことはもはやできない。複数ある装置によって、空間内にはさまざまな凹凸が生まれ、しかもそれぞれの耐用期間は異なる。

複雑で刹那的な装置は、私には、空間から間を奪っていくもののように見えるこのような収納も、空間を生かす工夫のひとつではあると思うのだが、間を奪われた空間は、どうも窮屈である。

テレビ番組で紹介される収納をどのくらいの人が実践するのか、私にはわからない。話題半分、アイディア半分というところであろう。工夫を思いついた本人が、一番楽しんでいることは間違いない。それこそが重要なのだろう。番組の意図も、実はそこにあるのかもしれない。

■ヨーロッパで見た収納

テレビ番組はともかく、収納と間との関係は、興味深い。間が重要であることは、収納と収蔵を区別する分岐点であるように思われる。私が収蔵というのは、天袋や物置など、日常的に開けることが少ない場所にモノをしまっておくことを意味する。それに対して、収納は、日常の用にあてるモノを納めることで、後者ではモノが頻繁に出し入れされることが前提である。そこには、アクティヴな空間が現出する。

そこで思い出すのが、ヨーロッパの家庭の収納である。食器やタオル・リネン類の収納が好例である。これらの品は、どの家庭でも一定以上の量をもっていて、同じように収納している。単純な収納方式であるが、その収納空間は、私たち日本人に強い印象を与える。

まず食器についてみると、たいていの家庭は、クリスタルのグラス類、磁器製の食器一式を、セットとして所有し、客の目がふれる部屋の、ガラス戸棚に納めている。同形のものを重ねるという、これ以外には考えられない単純なルールに従って並べられている食器類は、美しいと思われることを意識していて、実際に美しい。上等な食器の美しさもさることながら、整然と並ぶ食器全体のボリュームが、見る者にある種の圧力を与える。

食器棚の食器とは別に、システムキッチンの扉を開けると、日常用の食器が置いてあるのがふつうである。ただし、その場合でも、どの食器をどこに収納するかが明確に定められていることにかわりはない。「日本でも同じだ」と思われるかもしれないが、このきまりは、日本の家庭におけるよりはるかに厳格である。私たちの食器棚の中で小皿や小鉢の場所がときにずれている、ということはまれではないだろう。だが、ヨーロッパの家庭では、そういうことはまずない。間違ったところに食器を入れると、すかさず誤りを正される。このきまりは、食器の出し入れに必要な間と結びついている。人間の身体運動を含めて構成される空間が、ここにはつくられている。

図1 農家の地下室内部、自作の木製棚に、リンゴの種類を分けて収納。(オーストリア)

この空間の秩序から、たとえば、次のような使用の

きまりも派生する。日常用の食器はセットとしてそろっているわけではないから、花柄の皿もあれば、幾何学模様も、白無地もある。ただし、これらは大きさと形によって、「パン用の皿」というひとつのカテゴリーのもとにくくられ、その1枚1枚は区別されない。使用するときは、積んである皿の上のものから順に使う。下にあるものを引っ張り出すことはない。洗った食器をもとにもどすときも同様である。たとえば、皿の山の上に、マグカップをちょっと載せるということはないし、異なる大きさの皿がまぎれこむこともない。形と大きさによって用途は決められていて、それを収納する場所は一定である。

タオルやリネン類の収納にも同様のことがいえる。シーツや枕カバー、布団カバーなどの寝室で使うリネン類は、ひとまとめにして、「ベッド周辺の洗い物(Bettwäsche)」と呼ばれる。その収納は、衣装棚の中へ、用途によって区別して積まれる。収納に際しては、アイロンをかけながら、1枚ずつ、一定の大きさにたたんでいく。たたみ終わった完成品は、みな同じ大きさ、同じ厚さになっている。衣装棚に積まれたリネン類は、それぞれが最後の折り線を手前に向けて、レンガ積みのようにまっすぐに積み上げられている。ここでは、アイロンは、しわを伸ばすだけでなく、リネン類の嵩を圧縮して、同形・同サイズのものに仕上げるために、重要な役割を果たしている。

図2 衣装ダンス内部で、上部にリネンの山が築かれている。私が感心して見ていると、主婦は「日本人は別のしまい方をするのか」と、不思議そうに尋ねた。
(オーストリア)

この収納が美しいのは、積み上げられた布と布の間(ま)が、緊張感のある空間をつくっているからだろう。そこには小道具はない。空間の秩序は、主婦の労力と、しっかりした繊維の布によって維持されている。緊張感のある空間というのは、人に、それを乱さないようにしようという気持ちを起こさせる。

空間を細分化することは、実はけっこうやっかいである。別々のきまりをもつ空間を、複数生むことになるからである。守るべききまりが多ければ、人は自分のつくったきまりに縛られて、やがて疲れてしまう。そこで、緊張感を維持していくことは容易ではない。

■収納と管理、そして美しさ

ヨーロッパの収納について、もう少し考えてみたい。食器や衣類、寝具などの収納に、ヨーロッパの人々が求めているのは、モノをしまっておくことだけではない。より重要なのは、収納されたものが、必要に応じて用に供されること、すなわち管理されていることである。

その際、収納されているものが、財として位置づけられていることに注意しよ

う。収納されたモノは、財として管理されているのである。多数の同じモノが規則的に積み上げられていることは、その量をひと目で把握することを助ける。このことは、食器やリネン類が、本来、家庭の財として、位置づけられていることを想起すれば、よく理解できる。

セットものの食器やリネン類は、嫁入り道具として、歴史的に重要なものであった。かつて、固い麻の繊維を多用していたころは、リネンは祖母から母、その娘へ、と世代を超えて相続された。嫁入りの際に名前を刺繍して持参したシーツやテーブルクロスが、その孫娘の嫁入りのときに与えられたという例はめずらしくない。必要と思われる以上の量のリネンが、つねに家庭にそろえてあることも、このような背景を考えれば理解できる。

財の管理として見るならば、このような収納方法は、さまざまなところに見られる。たとえば、米俵が整然と積み上げられた風景を想起してほしい。それはやはり美しい。見る者は、大量の米俵から、多くの農家がそれにかけた多大な時間と労力を無意識のうちに思い浮かべ、米俵が象徴する富に思いをいたらす。それは一種の感銘といってもよい強い印象であるのだが、この感銘を与えるのは、米俵を整然と積んで管理している空間が、醸し出す緊張感であると思う。

また、薪材の積まれている風景も好例である。ヨーロッパでも日本でも、薪材は山から切り出した木を一定の長さに切りそろえて、整然と積み上げて置かれる。そうした薪材の柵が数百メートルもつづく道を歩いたことがあるが、それは圧巻であった。木が育つのに要した、とてつもなく長い時間、森から伐り出すときの人々の労力、さらに木の枝をはらい、一定の長さに切りそろえて積み上げる作業、どれほどの自然と人の力が、ここに凝集していることかと思った。薪材はしばらく置くことによって、乾燥を待つのであるが、ただ置いているわけではない。その柵を積むにあたって、薪の長さ、積み上げる高さは、一定に定められている。柵の長さは、財の量をはかる単位として読み取られるのであり、薪材はここで管理されているのである。

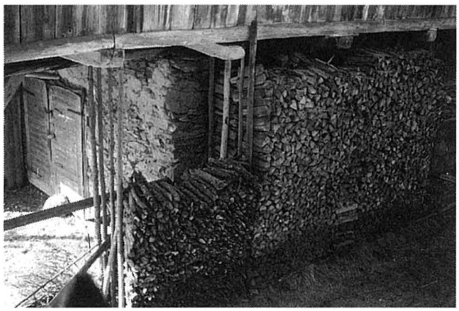

図3　農家の薪材。家畜小屋の周囲に、見事に積み上げられている。　（オーストリア）

財の管理には、もともとこのようなきまりが、必要に根ざしてつくられ、守られてきた。それはもともと経済的な目的にそったものであるのだが、そのようなきまりが守られている空間には、独自の美しさが伴う。

ヨーロッパの家庭の収納には、このような財の管理という大切な機能が貫かれているように、私には思われるのである。